新　刊　紹　介

1. 中近世祇園社の研究
　——祇園祭千百五十年記念——　　下坂守著
2. 奈良奉行所同心神武天皇陵修補日記
　安堵町歴史民俗資料館古文書解読グループ編
3. 古代ギリシアの民主政
　（岩波新書　1943）　　橋場弦著
4. アラゴン連合王国の歴史
　——中世後期ヨーロッパの一政治モデル——
　（世界歴史叢書）　　フロセル・サバテ著　阿部俊大監訳

下坂守著『中近世祇園社の研究——祇園祭千百五十年記念——』

法藏館　二〇二一・七刊　A5　七八二頁　一八〇〇〇円

『八坂神社文書』『八坂神社記録』の各新編の刊行など、中近世の祇園社に関わる史料調査・研究にも長年携わってきた著者による論文集で、前著『中世寺院社会と民衆』（思文閣出版、二〇一四年）以降に発表された祇園社および周辺関連地域に関する論文を中心に、新稿（第四部第二～四章）と史料翻刻を加えた大部の書である。

中近世にわたる祇園社の役職歴代の復元と、神子（巫女）の姿や社殿造営の変遷（第一部）、さらに祇園社と在地側の結節点となる御旅所の由緒に関わる史料の分析と近世における社家や内部構造（第二部）、四条河原の構成および支配の推移と芝居地の成立や景観（第三部）、近世における境内での開発地（新地）の前提状況と成立過程、さらに花街としての祇園に連なる祇園町および新地六町（祇園町東側）の茶屋株・遊女株を軸とした実態と推移の把握、その両境内町で行われたねりものの成立と断絶を挟んだ展開（神輿洗いねりものと御千度ねりものとの関係を整理）へと（第四部）、互いに脈絡のある論点が豊富な史料とともに詳細に記述される。史料編は、近世の茶屋・遊女・ねりものに関する記事を編纂する。

近世初頭までの記述を辿るのが紹介子には精一杯であるが、組織ないしは役職の連続性、空間としての一定領域の観点から、事象面での断続はあっても、中世から近世へと通して捉える姿勢は、鴨東・四条河原という地域が備えた歴史の厚みに対峙するものとなっている。実際、京都周辺（ないし都市京都を構成する）の寺社の「境内」という枠組みは、長きにわたり支配関係を規定し、祭礼・行事は時に中絶して変化しながら、社会の形を確認し維持するものとして機能した。宮司序文に言及される近世社殿修理への京中の山町・鉾町・輦町の関与（第一部第三章）はその一端となろう。絵図（地図）および絵画史料をふんだんに利用しながら、それらを並べて物理的な再現ばかりを志向するのではなく、文献史料から

立ち上がらせた歴史的な動向を組み合わせ、立体的に景観復元を行うあたりは、著者のこれまでの実践の蓄積があり、本書の特徴でもある。人々の生きざまであったり、支配・管理・売買営業といった政治・経済のはたらきが領域でどのように作用しているのか、多数の図面類から復元した景観のなかで描き出している。ジェンダーの語は用いないが、片羽屋神子（第一部第二章）や遊女（第四部）に関する専論でもある。祇園社という対象は、個別寺社研究の範囲に止まらず、都市史・芸能史ほかの社会史的な広がりで分析される論点を備えており、これらの有効な参照事例ともなるだろう。注には味読すべき可能性の指摘などもある。

第二部第一・二章で分析される「勅板」は、祇園会に際し錦袋に入れて奉持される神宝であるが、祭礼の創始や大政所の起源に関わる重要な史料でもあることが明らかにされた。宮内庁書陵部所蔵「感神院御旅所由来」〔九―三九九〕は、現在確認される「勅板」の写として最古で、明応九年（一五〇〇）の祇園会再興へ向けての運動のなかで、九条政基に依頼された揮毫の控えなどの可能性がある。別途この史料の紹介を試みており、小稿の提出も遅滞したことをお詫びする。

（藤原重雄）

安堵町歴史民俗資料館古文書解読グループ編

『奈良奉行所同心神武天皇陵修補日記』

安堵町歴史民俗資料館古文書解説グループ

二〇二二・二刊　A4　一一三頁　一〇〇〇円

ここに紹介するのは、奈良奉行所同心鳥山藤左衛門が記した『神武天皇御陵御修補中詰切相勤候日記并雑費金宿代金銀御扶持米請取方共』（以下「日記」）の翻刻である。

書き手である鳥山は、奈良奉行所与力中条良蔵の配下で永年補佐役を務めており、「日記」は、幕末に実施された神武天皇陵修陵事業において、鳥山が関わった職務を記した記録である。

「日記」は三部構成になっており、一部は、文久二年（一八六二）一一月、山陵奉行戸田忠至が実施した山陵調査のために大和国に到来した宇都宮藩士らの名前が書き上げてあり、京都所司代牧野忠恭が「山陵懸り」（山陵御用掛カ）中条良蔵へ、神武天皇陵修補への立ち会いを命じ、同心の鳥山・佐々倉権左衛門へも中条と同様に勤めるようにと記された達書などが写されている。二部では、文久三年五月から同年一一月にかけて実施された神武天皇陵修陵事業中、現地に詰めて立ち会いをした時の詳細な記録や工事の進捗状況、献木などの受け入れ、山陵奉行らの視察への対応、竣工後に実施される勅使参向の準備に加え、同年八月に勃発した天誅組の乱などの時事についても記されている。三部では、神武天皇陵修陵事業に立ち会った奈良奉行所役人らへの扶持米・宿代・雑用金・褒賞金の支給や休暇に関する文書が写されている。

実は、中条良蔵が記した手控えの『庁覧（覧）』（「大和国添上郡奈良餅飯殿町符屋家・中條家文書」奈良県立図書情報館まほろばライブラリーhttps://meta01.library.pref.nara.jp/opac/repository/repo/1096652/）からも、神武天皇陵修陵事業に関する動向が明らかになるが、「日記」は、より実務的な記録であ

り、兆域の工事についても詳細なことが最大の特徴であろう。

神武天皇陵修陵事業については、治定に至る経緯や文久の修陵事業以降に本格化する皇霊祭祀や陵墓祭祀の形成過程に関する研究が進む一方、地域社会については、陵墓修復や管理事業が実施された村の動向が明らかにされてきた。しかし、江戸時代を通じて実施された修陵事業では、畿内の各奉行所が山陵の調査や修補を担当したものの、奈良奉行所が大和国に所在する山陵に対して、どのように取り組んできたのかについて、十分に明らかになったとは言い難い。幕末の神武天皇陵及び諸陵の修陵事業の意義をより明確にするためにも、奈良奉行所と山陵との関係について明らかにする必要があり、本書は、そのきっかけになるであろう。

本書は、安堵町歴史民俗資料館古文書解読グループが翻刻し、丁寧な注や年表まで付けられている。また、所収された吉田栄治郎氏の「神武天皇陵考―現陵治定に至る経緯」を読むことで、古代から幕末にかけての神武天皇陵の経緯が理解できる。

本書は、調査のために撮影した「日記」の写真を底本として翻刻しており、現在では、原本の所在を確認することが難しいことからも貴重な成果である。一般の方から研究者にまで、広く本書を手に取っていただきたい。

（佐竹朋子）

橋場弦著

『古代ギリシアの民主政』（岩波新書　1943）

岩波書店　二〇二一・九刊
B40　二六八頁　九〇〇円

本書は、古代ギリシア世界のなかで生まれた民主政なる共同体運営の仕組みについて、その誕生から終焉までの歴史をとりわけ制度的側面に着目して論じた、オーソドックスな古代ギリシア史の概説的書籍である。国制にかかわる極めて複雑かつ専門的な情報を取り扱いながら、これを一般の読者や初学者にも正確に分かりやすく伝える本書の叙述には、長年にわたり古代ギリシア史研究を牽引してきた著者の手腕がいかんなく発揮されている。

さらに、本書には他の類書と一線を画する特長が多く認められる。たとえば本書は、残存する史料の制約からアテナイを民主政ポリスの典型としてきた旧来の研究に対し、アテナイ以外のポリスにおける民主政の仕組みを、たとえ断片的であっても参照・分析することで、古代ギリシア民主政のすがたをより立体的に再現しようとする。また、かつての研究が前四世紀後半のマケドニア王国による支配をもってポリス社会や民主政の終焉とみなしていたことについて、その命脈がはるかに長い期間存続したことをローマの時代まで射程に入れて論証する。近年目覚ましく進展している古代ギリシア史研究の成果をふまえて、このように新しい研究手法・研究視座から叙述を進めている点は本書の大きな特長である。

とはいえ、それにもまして顕著な特長となるのは、本書が古代ギリシアの民主政と近現代民主主義の接続にも目を向けていることである。近代以降（ややもすると現代に至るまで）、古代ギリシアの民主政には主として否定的・批判的なレッテルが貼られて

きた。本書はこの事実を確認するとともに、そうした虚像がつくりだされた経緯を分析することにより、古代ギリシアの民主政を「生きるもの」として描くこと、すなわち、古代ギリシア民主政のすがたをそこに生きた人々の視点からありのままに描くという本書の課題を果たす。そのうえで著者は、近現代民主主義（デモクラシー）の基本を「代表する」こと、対する古代民主政（デモクラティア）の基本を「あずかる」／「分かち合う」ことと考えるのである。この理解は、呼び名のうえでは同一のものを指しているようにみえる両者が、決して単純につながっているわけではないことを明らかにすると同時に、それぞれの本質を的確に捉えている。

従って、本書が単なる古代ギリシア史の概説書にとどまらないことは明白である。まずもって、近年の新しい研究成果を盛り込んだ情報の更新を実現している点において、専門研究者の利用にも資するところが少なくない。その一方、共同体の理念ではなく実体に着目し光を当てている点において、歴史家はもとより、およそ共同体に生きるすべての人にとって本書から学ぶところは多いはずである。本書を手に取り、「民主」ということばの意味をあらためて考えてみてはいかがだろうか。（内田康太）

『アラゴン連合王国の歴史 ——中世後期ヨーロッパの一政治モデル——』

フロセル・サバテ著　阿部俊大監訳

（世界歴史叢書）

明石書店　二〇二二・九刊

四六　三六八頁　五八〇〇円

本書は、一四世紀カタルーニャを中心に中世後期のアラゴン連合王国の政治史研究を専門とするフロセル・サバテ氏により、二〇〇〇年から二〇一七年に提出された論文計七本を邦訳しまとめたものである。監訳者の阿部俊大氏による「本書の位置付け」によれば、アラゴン連合王国研究は、自国史研究の伝統や史料の偏在・言語の問題から、現在のスペインの中でも特にカタルーニャ地方出身の研究者によって行われてきた。また、提出される論文もカタルーニャ語が中心であるため、外国人研究者にとってアクセスが容易とは言えない状況にある。さらに史料の性質上、政治史の分野に関する研究は多くはない。このような研究状況において、サバテ氏は連合王国の政治史を精力的に研究し、英語やフランス語等で論文を執筆して研究成果の国際的発信を行う人物である。彼の論文を邦訳した本書の意義は、日本の研究者に対しアラゴン連合王国研究の窓口を提供する点であろう。さらに同王国に関する知見を通じて中世のイベリア半島全体、ひいては地中海地域や西欧の政治・社会への総合的理解を促進することが「位置付け」に提示される本書の目的である。

かかる目的で選出された各論文の内容を簡単に紹介したい。第一章「アラゴン連合王国における領域、権力、制度（亀谷学・阿部訳）」は、一二世紀から一五世紀を対象に、連合王国領域の形成過程と各地で採用された制度を概観する。第二章「一四世紀のカタルーニャにおける王権の言説と戦略（阿部訳）」は一四世紀における王権側の

言説と国王権力がその強化のために採用した戦略を説明する。第三章「アラゴン連合王国における権力濫用（一三―一四世紀）―病的逸脱、腐敗、戦略、あるいは典型？（向井伸哉・阿部訳）」は当該時期の連合王国においていかなる行為が「権力の濫用」と見做されたのかを検討する。第四章「中世後期カタルーニャにおける都市自治体と王権（内村俊太訳）」は王権と諸都市との協力関係を分析し、第五章「中世後期カタルーニャにおける王権―定義と逸脱（久米順子訳）」は王権への陰謀を扱う。第六章「中世後期カタルーニャにおける諸身分、主権、そして政治モデル（黒田祐我訳）」は君主と諸身分との関係を軸にその政治モデルを分析し、第七章「アラゴン連合王国―アイデンティティと政治的・社会的特質（中嶋耕大・久木正雄訳）」は連合王国全体の政治・社会的特徴を多角的に論じる。

以上の七本は最終章のまとめを除きそのテーマが具体性を高める順に並べられており、カタルーニャを中心としたアラゴン連合王国の国制に関する基礎知識が得られるよう配慮されている。「後書き」にあるように、これらの論文においてはカタルーニャ以外の地域や非キリスト教住民についてはほぼ扱われていないが、それら他要素を含む全体的研究史は「位置付け」によって補われている。アラゴン連合王国研究の基礎的な邦語文献となる重要な一冊であろう。

（清野真惟）